パンデミック（完全版）

京谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
パンデミック（完全版）

【Ｎコード】
Ｎ１０８５Ｚ

【作者名】
京谷

【あらすじ】
ある日世界は突如著しい変化を起こした。
それはいい変化ではなく、破滅への第一歩。
そんなことはまるで知らない日本のある街に住んでいる男
「笹塚京谷」はいつものように日課の昼寝をしようとしていた・・・・

世界が変わった日（前書き）

突然ですが本当に申し訳ありません。
この「パンデミック」という名を使って作品を出すのは三回目で、
そのうちの二回は
失敗してしまいました。
というのも、一回目は連載物なのに短編として出してしまったので
没。
二回目は一話目を入れ忘れてしまったので失敗というバカなミスで
没。
というわけでこれが完全版です。
視聴者の皆様、本当にｍん独裁やり方にしてしまい申し訳ありませ
ん。

世界が変わった日

「あー昼寝できねぇじゃねぇか。」

自室で愚痴っているのは、笹塚京谷。

「日曜日だってのに外がうるさくて寝れやしねぇよ」
「祭りでもやってんのかぁ？」

カーテンを開けてみた。

「ああぁ？」

目に飛び込んできたのは、今までやったことのあるゲームのような光景だった。

「人が人を襲ってんのか！？」

「！？」

襲われている人を中心にして真っ赤な海ができ始めた。

「血だよな・・・あれ」

（このままじゃまずい！助けなきゃやべぇよ。）

部屋にあったバットを手にし部屋から飛び出した。

家から出ると状況の悪さが一瞬でわかった。

飛び交う声は悲鳴だけ、道路に投げ捨てられている車の中には燃えているものまであった。

「なんだよ？朝はこんなんじゃなかったぞ」

（とにかく助けなくては）

京谷は襲われている人に向って走り出した。

（以外に距離があったんだなぁ・・・）

京谷は人命救助をしようと道を爆走中、バットを片手に持って。

普段なら今の笹塚の恰好を見れば悲鳴の一つでも上がったかもしれないが、

悲鳴はもう充分なくらいに至るところから聞こえていた。

「ようやく着いた。」

一人の人間に群がる人間。いじめの瞬間を見ているみたいで少し頭に血が昇る。

「おい！なにやってんだ。いい大人が多勢に無勢とはよ！」

「ウウウウウウウウウウ」

「あ？聞こえねぇよ。とにかくそこから離れろ。」

「ウウウウブチッウウウウ」

「おい！何やってんだ、お前ら！」

京谷は自分が無視されていることで若干切れ始めていた。

「おい・・・いい加減離れねぇとこいつでブン殴るぞ！」

「ウウウウウウウ」

「警告はしたからな。くそ野郎！」

（こいつでどうだ！）

ドゴッ！

フルスイングが奴の背中にヒットした。

世界が変わった日（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました！

救出

彼はこんな異常事態が起きているというのに口元に笑みを浮かべていた。

（や・・・やべ。楽しくなってきた！）

あれからしばらく奴の体中をバットで殴っていたが、奴は根気よく何度も立ち上がってくる。

（まさか人を堂々と殴れる日が来るなんてよ・・・楽しくなっちゃうよなぁ！）

ゴッ！

頭にフルスイングがヒットした。

ドサ

「あ！」

バットで小突いてみたが、もう立ち上がることはない。

（死なない訳じゃないのか。）

「どうすんだよ・・・」

（襲いかかっていたからといって、殺すのはまずいよなぁ・・・）

そこで事態は急変した。

「おいあんた！ゴフッゴホ」

「ん？」

襲われていたやつだ。

「こいつらを殺すことに躊躇なんていらない！ゴホッゴホッ」

（何言ってんだこいつ・・・）

「こいつらはもう俺たち人間とは違うんだ！」

「はぁ？」

「何が起こったのか、俺も詳しくは知らんが、とにかく奴等は俺たちとは違うんだ！」

「信じろと？」

「あいつらの異常さは殴って殺したあんたが一番よくわかっているだろう！ゴホッガフッ」

（確かにそうか。）

「まぁとりあえずあんたを助けるよ。」

「駄目だ・・・俺は噛まれた。」

「何ゲームみたいなこと言ってんだよ！確かに血はかなり出てるが意識もしっかりして・・・」

「俺もあと何分かしたらさっきの奴みたいになる。」

「！」

「まさか本当にゲームみたいなことが・・・」

「たぶんな。俺は見たんだ・・・噛まれた奴がどうなるかを。」

「だからってよぉ！」

「いいからいけ・・・あんたみたいな勇気のある奴を待ってる人はまだいるはずだ！」

「くそ！本当に助ける方法はないのか？」

「ない。ゴフッゴフッ」

「わかったらささっと行け！俺が奴らみたいになる前に・・・」

「・・・・・・・わかった。」

「それでいいんだ。」

あれから京谷は一度家に帰って、身支度を整えることにした。

「やっと着いた。」

（家に帰ってくる途中はあまり「アレ」は見かけなかったなぁ。）

「まずは飲料水か。次は食糧だろ。後は・・・・・」

家にある使えそうなものはとりあえずカバンに入れた。
武器はバットのままである。

「とりあえずこんなもんか。」

（あとは・・・）

「母さん行ってくるよ。精々おれが死なないよう上から祈っていてくれ。」

京谷は和室の仏壇の前で手を合わせる。
母は一年前に他界した。
不慮の事故であった。

（今はしんみりしている暇なんてないか・・・）

「よしいくか！」

ガチャ
家のドアを開けたら数メートル先に「アレ」がいた。

（ッ！！）

あまりの驚きに声も出せないまま硬直してしまった。

（・・・・・アレ？襲ってこない？）

「まさか見えてないのか？」

試しに玄関にあった靴べらを道路のほうへ投げてみた。

コツン・・・

小さな音が鳴った。

その瞬間目の前にいた「アレ」はゆっくりと体の向きを変え、道路のほうへ向かっていった。

（やっぱりそうなのか！）

「これでいちいち殴らなくても進める！」

声を出しすぎた。
道路へ向かって行っていた「アレ」がまた戻ってきた。

「ッチ！」

ゴァン

ドサ

一発K．Oだ。

（まだ数が少ないからいいが都市部へ行くともっといるんだろうなぁ）

「さて気を取り直して行きますかぁ。」

そう言って京谷は家を後にした。

救出（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました！

出会い

家を出てから早いことにもう一時間が過ぎた。

「誰もいねぇじゃん・・・」

自分の家の周りや、商店街なども言ってみたが、皆避難したのか「人」はまるで見当たらなかった。

「皆「アレ」になっちまったのかよ!?」

商店街を埋め尽くすのは「アレ」の群ればかり。
助けをほしがっている人なんてだれ一人見当たらなかった。

(場所を変えるか・・・)

「ちょっと街に近づいたほうがいいのかなぁ。」

(街に近づけば人もいるだろうがそれは「アレ」が増えることも意味するんだよなぁ)

「はぁ〜」

「今日はゆっくり昼寝して夜を迎えようと思っていたのによ！」

また、声を出しすぎてしまった。

（あ・・ヤベ・・・・）

「ウウウウウウウウウウ」

「くそッ」

（また走るか！）

と思った時だった。

遠くから一際大きな叫び声が届いた。

「ちょっと！だれかいないのー？変態が溢れてるんだけど。」

（馬鹿かあいつ！あんな大声出しやがって！）

「ちょっと待ってろーー！今行くぜ。」

女子を馬鹿にしながら自分も大声を出す馬鹿な京谷である。

「わ！？ちょっとあんた何？バットなんか持って。」

「お前周りの状況が見えてねぇのかよ！？」

「変態が増えただけでしょ？」

「・・・・・・・・・・」

「なによ。」

「お前・・・馬鹿だろ。」

「ッ！？」

「ちょ・・ちょっと！初対面の女子に向かってバカって・・・あんたこそ馬鹿じゃない？」

「はあ！？俺はお前ほど馬鹿じゃ・・・」

「ウウウウウウウウウ」

（やべ！忘れてた。）

「おい！茶番はいいからとにかく逃げるぞ！」

「茶番って・・・ちょ・・ちょっとどこいくのよ？」

「聞こえてなかったのか馬鹿が、逃げるんだよ」

「馬鹿ってッ！・・・まぁあいいわ。で何所に逃げんのよ」

「とにかく走る。」

「あんたやっぱ馬鹿でしょ。」

「うるせぇ！いいからいくぞ！」

「ちょ・・ちょっと待ってよ！」

こうして京谷と馬鹿（名前教えてもらってないので）は一時的にチームを組むことになった

出会い（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました！

頼れるものはない

「「はぁはぁはぁはぁ」」

どれくらい走ったんだろう？

辺りの景色は普段あまり見ないものへと変わっていた。

「ここはどこなんだ？」

「確かこの近くには警察署があったはずよ！」

「お前詳しいな。」

「趣味が散歩なの。この街の地理はまかせてよ。」

「へぇ～」

（ただのバカじゃないのか）

「そういやお前名前は？」

「山岡美咲」

「俺は笹塚京谷だ。」

「でこれからどうするんだっけ？」

「さっきも言ったけどここの近くには警察署があるの。」

「で？」

「でって・・助けを求めるにきまってるでしょ！」

「この急な異常事態に警察が俺たちをわざわざかくまってくれるとは思えんが・・・」

「だ・・だって市民の安全を守るのが警察でしょ！なら・・・・」

「わかった。じゃあ一度行ってみよう。ただ受け入れを拒否されたら次は俺の指示に従ってもらうからな。」

「わかったわ。」

「じゃあ早速行きましょう！」

結果は京谷の予想道理だった。
警察の方も迷っていたみたいだが、やはりこれ以上不安因子は増やしたくなかったらしい。
実に大人の対応だ、と思ったがやってくる「アレ」に向かって無駄に弾を打ち続けている様は少し残念だった。

「だから言ったろ。警察だって俺たちと同じで自分の身を守るのがやっとなんだ。」

「・・・・・・・」

「まぁいい。とにかくさっき言ったとおり次は俺の言ったところに行くからな！」

「わかってるわよ！」
「で、どこに行きたいの？」

「ホームセンターだ。」

「なんで？」

「なんでって、武器の山だろ。ホームセンターって」

「あんな材木と工具とかばっかりの場所にいってどうすんのよ？」

「武器を作るんだよ。バットだけじゃ心細いからな。」

「作るってあんたねぇ、子供の工作じゃないのよ？武器を作るってことは。」

「いざとなったらチェンソーでも持ち出すよ。」

「いいから早く行くぞ。もうそろそろ日も暮れてくるだろう。早めにいって今日の寝床も確保するぞ！」

「寝床ってあんた、野宿でもするつもり？」

「いざとなったらな。」

「私は帰るわよ。お風呂だって入りたいし。」

「我がまま言うなよ。こんな状況でいちいち家に帰ってられるかってんだ。」

「だからって野宿しろっていうの？」

「わかった。お前は高級な寝袋に入れてやるから勘弁してくれ。あと野宿すると決まったわけじゃないから。」

「私がそんなもので釣られるとでも？っておい聞けよ！わかったわよ。わかりました！ついていきますよ！どうせ家にはだれもいないし。」

「そうと決まれば急ぐぞ。日暮は近いからな。」

「ホームセンターならここから近い所に大きいやつが一つあるわ。そこに行きましょう。」

「おう！」

そうして京谷と美咲は歩き出した。

新たな真実

あれからじばらく歩いていたが、だんだんと「アレ」が増えてきている気がする。
時間とともに噛まれた人が増えていったのだろう。
または、自分たちが都市部に近付いているのかもしれない。

「あれよ。」

「確かにでかいなぁ・・・」

「この街一番だからね。」

「とりあえず入るか。」

「ええ。」

中はとても広く、物も沢山あった。
材木、工具、観葉植物、隅の方にはスナック菓子や少量の飲料水、
その他いろいろなものがあった。
ただ、明らかにおかしなところがある。
それは客と店員がいないということだ。
たぶん逃げ出したか「アレ」になって音のする方へ向かったのだろ

う。

「中もすごいんだなぁ。なんでもあるんじゃねぇか？」

「そうね。じゃ早速使えそうなものでも集めましょう。」

「じゃあ手分けしよう。おれは右からぐるっと回って使えそうなやつを持ってくる。」

「わかったわ。ただなんか護身用の武器とかがほしいんだけど・・・」

「あ、そうか。じゃあこれを持って行け。」

京谷はバットを渡す。

「ありがとう。でもあんたは？」

「そこら辺から適当に拾ってくよ」

「そう」

「じゃあ行きますか！」

「うん！」

二人揃って買い物かご押して自動ドアをくぐり左右に別れた。

京谷は品を眺め、

（まずは適当に使えそうなものは全部持ってくか）

と考えていた。

その頃美咲は・・・

「あー！これ超いいじゃん！！」

と言いつつ手に取った鉄パイプの近くには

「あくまでも工業用ですので、振り回して遊ばないでください。」

と看板が立ててある。

「今じゃ鉄パイプも生き残るための道具なんだよね・・・」

それからしばらく経ち二人は合流した。

「俺はとにかくたくさん持ってきた。」

「私は殴ることに使えるやつばっかりよ。」

ここから選別が始まった。
まずは自分の身を守れるものから選んでいった。
肘・膝に付けるプロテクター。以外にこういうものもあるもんだ。
あとグローブ。普通のバッティングのときなどに使うものだ。
思いっきりバットを振っても手から滑り落ちることは無くなるので、
無いよりはいいだろう。

「ホームセンターってすごいな。」

「え・・ええ。そうね、私もびっくりしたわ。」

次は勿論武器だ。
バットはポリプロピレンをカーボンブラックで覆っているバットに
変更した。
ちなみにポリプロピレンとは、プラスチックの中では強度が高く、
水に浮かぶほど軽く対熱性にも優れたプラスチックである。
あと鉄パイプにバレーなどで使うテーピングを巻いたもの。
最後にチェンソーだ。

「バットや鉄パイプならまだ分かるけど、あんたチェンソーなんて扱えんの？」

「説明書とかあるだろ」

「これって展示品でしょ？説明書は付いてくるのは倉庫にある箱付きじゃなきゃないわよ！」

「大体はこんな感じだろ？」

京谷はチェンソーの近くに置いておいたあった農機具用っと書いてある燃料をタンクに入れ始めた。

「ちょ・・ちょっと！？大丈夫なの？」

「確か大丈夫だ。あとは・・・」

今度はさっき開けたタンクじゃない方の蓋を開け、チェンソーオイルと書かれたものを入れた。
そのあと何か細々と操作した後に

「これでいいはずだッ！」

と言って京谷は思いっきりスタートハンドルを引いた。
すると、

ポン、ポン

と軽い爆発みたいな音が鳴った。
また京谷が細々とした操作をしたら、ゆっくりとチェンソーの刃が動き始めた。

「よし！」

「あんた何で知ってんの！？」

「昔親父から教えてもらったんだ。」

「あんたの親はアウトドア好きなの？」

「親父が自衛官なんだ。」

「はぁ！？」

「なら助けを求めればいいじゃない！」

「できたらやってるよ。」

「？」

「親父が所属してるのはＯＯＯ駐屯地で、ここからかなり離れているんだ。」

「なら電話してきてもらえばいいじゃない！」

「この状況がここだけってわけじゃいんだ。さっき店にあったテレビで流されてた映像を見る限りこれは世界規模らしい・・・」

「そんな・・・」

「だからきっと親父も今頃対応に大忙しだと思う。だからどっちにしろ俺達は自分たちの力で生き残らなければならないんだ。」

「・・・・・」

「わかったら準備しろ。さっさとでるぞ。戦いは避けたが店の中にも数匹「アレ」がいる。」

「今度はどこに行くのよ。」

「移動手段として車を手に入れたいんだ。」

「盗むの？」

「もう俺たちは盗みをやったんだ。今更なんだ？」

「いや車は鍵が掛ってる可能性があるじゃない？そういう時はどうするの？」

「だから俺たちが次に行く場所は鍵も一緒に手に入る場所だ。」

「どこよ？」

「車販売店だ。」

「その手があったわね。」

「普通盗むより早く車販売店に行くことを考えないか？まぁこれからやるのは結局盗みなんだがな・・・」

「ここから近いのは中古車販売店ね。」

「お！運が良ければ大人数乗れる車両が手に入るかもしれないな。」

「じゃ行きましょうか。もう日も暮れるし。」

「そうだな。」

「てか結局武器作りはやらなかったわね。」

「あ・・わすれてた・・・」

こうして京谷と美咲は新たな装備も手にいれ次の目的地へ向かうのであった。

日暮れまであと二時間三十分

絶望と希望と絶望

京谷はチェンソーを振り回していた。

「いったいどこから出てきたのよ！」

「元から居たんだろ！俺たちが音を立てすぎたんだ！」

「早くここからでないと日が暮れちゃうわ！」

「分かってる！」

数分前　京谷たちがホームセンターから出ようと出口に向かったらそこには「アレ」が居て、出口をふさいでいた。
どこから出てきたかは分らないが壁を作れるくらいの数はいた。
その壁に京谷はチェンソーを食い込ませる。

ヴィィィングジャグジャグジャボトボト
チェンソーの音と肉が裂ける音、肉が地面に落ちる音がした。

「よしこれならいける！」

ヴィィィィ・・・・・

（刃の回転速度が落ちてる！）

「くそ！チェーンオイルが少なくなってきたか！」

さらに追い打ちをかけるように刃の間に血脂や肉、骨の破片などがたまっていく。

「こいつはもうだめか！ならば・・・」

京谷は新しくなったバットを手に取る。

「美咲！バットだけじゃ一人で戦えない！手伝ってくれ！」

「うん！」

ブォン！ゴォンッベゴッ

（さっきみたくはいかないがこれならいける！）

「ウウオオオウ！」

「ッ！？は・・・はなして・・・」

「美咲ッ！」

（くそッ！これじゃあ間に合わねぇ！）

ッタァン！

ドチャ

「美咲！」

「だ・・大丈夫。それより一体誰が？」

「君たちの援護をする！」
聞きなれない声がした。

「あんたは誰だ！？」

「警官だ！名前は加藤。」

「なぜここへ！？」

「近くの警察署で籠城してたんだが、あそこは奴らに占領されたんだ！」

（美咲が言ってた警察署か・・・）

「だがなぜここへ？」

「ここなら使えるものがたくさんあると思ってな！」

「一応銃と弾はもてる限り持ってきたんだが、弾はいずれ切れるからね」

確かにその通りだ。

「ちょっと！二人とも話してないでさっさと準備してまだ来てるわ！」

「じゃあ加藤さん！援護は頼みました！」

「ああ！任せてくれ！」

ッタァン　ゴォガ！　ドゴッ！

ッタァン　ッタァンッタァン！

「はぁはぁ・・あと少しね。」

「ああ。そうだな。」

「もうひと踏ん張りだ！」

ッタァン　ッガ！　・・・・・・

「お・・終わったか。」

「そうみたいね。」

「よかった。結構弾も使ったからね。」

「ありがとうございました。」

京谷はお礼をするため振り返った。

（なんだ・・・加藤さんの後ろになんかいないか！？）

「ッ！！加藤さん危ない！」

「？？」

京谷たちは不運なことに遠距離武器を持っていなかった。

「アァァァァァァァ・・・」

「加藤さんぁぁん！」

京谷は走ったがバットを思いっきり振って「アレ」を離そうとすると、
どうしても加藤さんが邪魔になる。

グチャ・・・

加藤さんが首を噛まれて倒れこんだ。
その瞬間に襲ってきたやつの頭にフルスイングを叩き込んだ。

「加藤さん！」

「銃を持った大人が真っ先に死ぬなんて、馬鹿みたいだな・・・」

「ッチ！」

「なぁに俺だって噛まれた奴がどうなるかぐらい知ってるさ・・・
仲間の死にざまを見てきたんだからな・・・」

「・・・・」

「そんな顔しないでくれ・・・援護した甲斐がないじゃないか・・・
」

「大丈夫けじめは自分でつける・・・少し目をそむけていてくれ・・
・」

すぅーはぁー
深呼吸の音が静かな店内に響く。

ッタァン・・・

「・・・・」

「持てるものを持ってくぞ。美咲。」

「うん。」

「大丈夫か？」

「徐々に慣れていくようにするわ・・・」

「そうか・・」

それからは無言で加藤さんの所持品を漁った。
手に入れたのは五発まで弾を装填できる拳銃を三つと弾を十五発くらいだ。
後はどこの鍵かもわからない鍵だ。
たぶん加藤さんたちが籠っていた警察署で付き合える鍵だろう。

「銃はできるだけ使うな。音もでかいし、素人の俺たちじゃ遠くから頭へ当てるのは難しいだろう。」

「いざという時にっていうわけね。」

「ああ」

「じゃ・・じゃあ行きましょう。中古車売り場へ」

「案内は頼んだ。」

ようやく本来の目的に向かって進み始めた京谷たちは
ホームセンターを後にした・・・

つかの間の休憩

「おい。いつになったら着くんだ？もう日が暮れちゃうぜ。」

「わかってるわよ！これでも近道使ってる方なんだから！」

ホームセンターを出てからもう二十分位経っていた。
美咲が近道を使ってくれているおかげか大通りとかよりは
「アレ」はあまり見なかったが、それでも一匹や二匹はやはりいた。
だがこいつらは無駄な音を出さなければ襲ってこない。
楽なもんだ。

しかし状況は変わった。
美咲が大声で「わかってるわよ！これでも・・・・」と叫んだから
だ。
しかも「アレ」の聴力がとてもよかったのか、美咲の声がすごかっ
たのかはわからないが、
大通りの方からも敵が迫ってきていた。

「お前なぁ・・・」

「しょうがないでしょ！あんたが馬鹿にするから熱くなっちゃたの
よ！」

「おれは馬鹿にしてない。あとそれ以上馬鹿でかい声を出すな。」

「あんたねぇ！」

「お前のそのでかい声があれば「アレ」の鼓膜もぶち破れるんじゃないか？」

「ッ！？」

「わかった、わかった。俺が悪かったよ。だからそれ以上大声出すな。」

「わかったわよ。」

「とりあえずこの状況をどうにかするぞ。」

「ええ。でもどうやって・・・」

いま自分たちがいるのは周りをコンクリートの壁に囲まれた一本道。
前と後ろからは「アレ」が迫ってきている。
残された道はただ一つ。

「壁を登るぞ。」

「わかった！」

初めに壁を登ったのは京谷。次に美咲だ。
だが、美咲が登り始めた時にはもう「アレ」が美咲に向って手を伸ばしていた。

「美咲早くしろ！」

「わかってるけどッ！足をつかまれちゃったの！」

（まずい！！！）

京谷はポケットをあさる。
ポケットから出てきたのは夕日に晒されて黒光りする拳銃だ。

（この距離なら！）

「美咲ちょっと我慢しろ！」

「え！？」

ッダァン！

ズチャァ

ドサッ

腕に軽い衝撃が走る。
あたりに火薬っぽい臭いが漂う。
これが硝煙の臭いというものだろう。

「ッ！？」

「すまない。これしかなかったんだ。」

「え・・ええ別にいいわ。まだ耳がキーンってなってるけど怪我はないわ。」

「さぁ掴まれ！次のやつがもう迫ってる！」

「うん！」

こうして京谷たちは難を逃れた。
降りたところは二階建ての民家だった。

「ねぇ？今日はここで睡眠をとらない？」

「住んでる人が籠城してるかもしれないぞ。」

「ちょっと見てくるわ。」

「俺も行くよ。」

外から居間を覗き込む。
中にはだれもいない。
今度は玄関にまわってドアノブに手をかけた。

ガチャッ

「開いた！」

「じゃあ入るか。」

中は綺麗で、「アレ」に押し入られた形跡はない。
京谷たちはドアの鍵を閉めて部屋を探り始めた。

「まずは安全の確保だな。」

「まずは二階からいきましょう。」

二階の安全は確保できた。
二階は子供部屋だったんだろう、明日（月曜日）に向けて宿題などをやっていた形跡がある。

「ほんの数時間前まで普通の一日だったのに・・・どうして」

「そうだな。」

「だが今は悲しんでいる暇なんてない。まずは安全を確保して今日を生き残ることに集中するんだ。」

「わかったわ。じゃあ下の階も見に行きましょう。」

「ああ。」

一階も安全だった。

「窓の近くにテーブルとかを寄せて強化しとこう。」

「そうね。夜はどうしても無防備になるからね。」

かれこれ三十分近くもかけて窓の周りに物を置いた。（二階からも物を運んだからこんなにかかった。）

「じゃあ風呂でも入りながら服を洗濯するか。」

「洗濯してる間は何着ればいいの？」

「そこら辺にあるものでも着てればいいだろ。」

「う・・・うん」

（洗濯機の音でやつらが寄ってきたりしないよなぁ・・）

と思いつつも洗濯を始めた。

「先に入っててていいぞ。俺は見張っとくからよ。あとバリケードがちゃんとしてるかチェックとかもしなきゃだめだしな。」

「じゃあお先に・・」

（ついでに布団でも準備しとくか）

「確か予備の布団は二階にあったんだよな。」

階段を上る。
なんか足音が多い気がする。しかも足音が聞こえてくるのは自分の後ろからではなく前・・・つまり二階からだ。

「！！」

バットを握る手に力が入る。

（ここで振り回せんのかなぁ・・・）

後三段ぐらいで二階だ。

（よし！いくか！）

「ウォォォォォォ！」

「ぎゃあああぁ！？」

（人？）

「許してください。許してください。僕は何もしていない。だから・・・」

（この男はここの住人か？）

「おいあんた。」

「ひぃぃぃぃ！」

「いやひぃぃぃぃじゃなくてさ、あんたここの住人か？」

「え？普通の人か。よかった。ええそうです、ついさっきまでここで平凡に暮らしてました。」

「すまないな勝手に上がって。一応確認したんだがまだ人がいるなんて。」

「あ・・屋根裏部屋に隠れてたんです。窓の外を見たら変な奴があふれてたんで。」

（押し入られた形跡はなかったけどな・・・血痕もなかったし・・・まさか家族に置いてかれたのか？）

「あのそれでなんだが俺たち今日一日ここにかくまってくれないか？」

「いいですけど、俺たちって？」

「ああ、下で今女が風呂に入ってるんだがそいつは仲間なんだ。」

「仲間を組んで立ち向かっているんですか？」

目を輝かせて男は聞いてくる。

「まぁあそんなところだ。」

（大体はこっそりと動いてやり過ごしてるけどな・・・）

「ひとまずお礼をいっとくぜ。ありがとう。風呂まで勝手に借りちゃって。」

「別にいいんですが下にいても大丈夫なんですか？」

「ああ、たぶん大丈夫だ。窓の近くにはバリケードをつくったし、ドアの鍵もちゃんとしたしな。」

「ありがとうございます！これで心お気なくトイレに行ける。」

（そのために降りてきたのか。）

ダッダッダッ・・・・・

階段を降りて行った。

（さぁてッ布団でも取りに行くか。あ、布団使っていいか聞いてねぇや。まいいよな）

「きゃあああああ」

「ぎゃあああああ」

「ッ！？」

（出会ってしまったか、あの女と！）

「まずいぞ！」

「ぎゃあああ！助けてぇーこ…殺されるぅ～！」

降りてみると美咲が恐ろしい形相でバットを振り回している。

「お・・おい美咲！」

ブゥン！

（あ・・あぶねぇ！）

「おい聞けって！」

京谷もバットを振る。

バットとバットがぶつかり合った。

ゴォァ～ン

とても不思議な音が大音量で響き渡った。

手がびりびりする。

（美咲のやつなんて力でバットを振ってたんだ！？）

「こいつはここの住人だ！」

「二人で確認してた時は誰もいなかったじゃない！」

「屋根裏部屋に隠れてたんだとよ！大体「アレ」だったら叫び声なんてあげねぇだろ！」

「あ…それもそうね」

「まぁいい。俺は風呂に入るからちゃんと謝っとけよ。」

「う・・うん」

こうして一日目は何とか乗り切った京谷たちは、明日こそ中古車店へ行くと決意した。

ちなみに屋根裏部屋に隠れていた男は少し漏らしてしまった。

理由はもちろん美咲が濡れた髪を振り回し、鬼の形相でブンブンバットを振り回してきたからである。

新たな一歩

「う～んッ・・・」

京谷は大きく伸びをする。

「朝か・・・」

壁に飾られてあったアナログ時計に目をやると、時計の針はちょうど午前九時二十分を指していた。

美咲を起こそうと辺りを見渡す。

すると隣に動く影があったので、声をかける。

「おい美咲起きろ！そろそろいくぞ。」

「ん～ん・・・わかったぁ・・・・」

美咲の声がしたのは京谷とはテーブルを挟んで置かれてる布団からだった。

「え？じゃあこれは？」

「あ～？・・・あ！おはようございます京谷さん、美咲さん。」

（びっくりしたぁ！こいついつの間に俺の隣に布団を置いたんだ？）

「ま・・・まぁいい。飯を済ませてさっさと行こうぜ。時間は大切だからな。」

「ご…御飯ですね！少々お待ちを！」

（万能だなぁ～・・・まだ名前も知らないけど）

普段の朝ならもっと時間を使うであろう出発準備も、今日はとても早かった。
男子の京谷ならまだしも、女子の美咲まで早かった。
きっと知らないうちに体はこの状況に順応しようとしているんだろう。
そうして京谷たちは乾いた服に着替え、バットを握りしめる。

「さぁ行きますか！」

「ええ！」

「あ・・・あのぉ・・自分もついて行ってもいいでしょうか？」

「別にいいけど自分の身を守れるものぐらいはあるんだろうなぁ。」

「は・・はい！ちょっと待っててください！」

四、五分が経った。

「準備はばっちりです！」

「「お・・・おお～」」

二人揃って声を上げる。

男が装備してきたのは明らかに自分たちのものより上等な装備ばかりだ。
唯一勝ってるとしたら京谷たちは銃を持っているということだけだろう。

「そんな装備どこで手に入れたんだ？」

「ネット通販です！」

「その軍服もシールドみたいなやつもか？」

「ええ。最近は売ってるんですよ、こういう実際に軍で使われていたものとかが。まぁこのシールドは軍のものではないですけど・・・」

「なぜ買ったんだ？」

「え？ま・・まぁサバゲーが好きなんで。僕。」

「それだけでこんな本格的に？」

「ええまぁ。でもみんなこんな感じですよ。」

「と…とにかくあんた名前は？」

「あ、そういえば自己紹介してませんでしたね。僕は霧島健斗です！」

「わかった。俺たちの名前はもう知ってるんだよな？」

「はい！美咲さんに教えてもらいました！」

「そうか。後出る前に言っとくが、外では大きい声を出すな。「アレ」が寄ってくるからな。」

「・・・・・・・「アレ」？」

「ああ。窓の外でうろついていたやつらのことを俺たちはそう呼んでる。」

「わかりました。」

「じゃあいくぞ！美咲。健斗！」

「はい！」

「うん！」

こうして京谷たちは霧島の家を出た。
目指す場所はもちろん中古車店だ。

「健太。まずはお前は自分の身を守ることに集中しろ。」

「はい。」

「美咲。ここからならどれくらいだ？」

「目印がないからわからないけど、昨日通っていた道の近くだから・・・歩いて三十分、小走りで十五分～十分ってとこかしら。」

「わかった。じゃあ小走りで行こう。」

「あんた走れんの？バットと鉄パイプとその他いろいろを持ったままでさぁ？」

「なんなら僕が持ちますよ。」

「いや大丈夫だ、大体昨日だってこれで走ってただろう。」

ちなみに京谷は両手に武器を持ってるのではなく、バットは右手に、鉄パイプはしょってるバックに縄でくくりつけている。
ぱっと見はＲＰＧなどに出てくる勇者を現代風にしたようなものだ。

「じゃあいくぞ。できるだけ音は立てるな。少しくらい「アレ」にばれても走れば戦わずに済むから、できるだけ戦うな。」

京谷たちは小走りを始めた。
途中で何度も敵に向かおうとする健斗を引きとめながら順調に進んでいった。

そして約十分後・・・

「ここか。」

「ええ。そうよ。」

「な…何をするんですか？ここで。」

「ああ言ってなかったな、健斗には。今から車を盗む、心の準備はできたか？」

「え・・・ええ！盗むって今からですか？」

「当たり前だろ。」

「え・・。でも・・・」

「こんな状況なんだ。生きることに必死になれ。なぁに怖がることはないさ、いまじゃ警察もろくに機能していないしな。」

「わ・・・わかりました。」

「まぁ今回で慣れるさ。」

「じゃあ行きましょう。」

「ああ。」

店内に入る。
中にはざっと見る限り五体くらい「アレ」がいる。

「じゃあ安全確保と行きますかぁ。」

「ええ。」

「二人とも怖い・・・・」

「あ、健斗は見ているだけでいいぞ。この数なら余裕だしな。まぁおれたちが危なくなったら助けてくれ。」

そういうと京谷は優しい笑みを浮かべて歩いて行った。

オラァ！ブンッ

ズシャァ

フッ！ブンッ

ズシャァ

京谷がさっきよりも楽しそうな笑み浮かべて戻ってきた。

「ヒィィッ！」

「？？」

「まぁいいか。よしじゃあ早速車の鍵でも探しますかぁ。」

「車を選んでからじゃなくて？」

「鍵は一応全部持っていけばいいだろ。」

「じゃあ行くか。あ、そうだまだ敵がいるかもしれないから気は抜くな。」

店は一階建だったので、数分で全部の部屋を見ることができた。
怪しそうな場所は一つだけだった。
それは店長の部屋であろう場所に設置されていた箱だ。
鍵は南京錠で軽く締められていただけなので、バットか銃を使えば開くだろう。

「じゃあ開けるぞ。」

「ええ。」

バットを振り下ろす。

ブウォン！

ガキィィン

ガシャ・・・

「あ・・開いた！」

「じゃあ次は車選びだが、外は中のようにはいかないだろうから気をつけろ。」

「じゃあ行きましょう！」

「はい！」

「おう！」

外は意外にも「アレ」の数は少なかった。
しかも今から行く車置き場には見る限り一匹もいない。
さっきはもっといた気がするがいったいどこへ行ったのだろう？
とにかく今の京谷たちにはラッキーだった。

「少ないな…まぁ好都合か。」

「気をつけろ。ぱっと見はいなくても車の陰にいる可能性もあるからな。
と言ってるうちに二人は遠くまで進んでいた。

「聞いてねぇや・・・」

「さーてどの車にしようかしら。」

「大きい車にしましょうよ美咲さん。物もたくさん入れられるし寝れるし。」

「そうねぇ～どれがいいかしら。」

いったそばから「アレ」が陰から飛び出してきた。
二人の後ろから出てきたため二人は気付いていない。

「ッ！？」

「おいッ！美咲！健斗！」

「「？？」」

（くそッ！またあれを使うか！）

京谷はポケットから銃を取り出す。
標準を定める。
引き金に掛けた指に力を込める。

タァンッ！

頭を狙って放たれた弾丸は「アレ」の肩に当たった。

（美咲たちに当たらなかっただけいい方か・・・）

「美咲ッ！健斗ッ！」

こちらに振り返ろうとしている「アレ」に近付いてもう一度弾丸を放つ。

ッタァン！

ドサ

今度はうまくいったようだ。

「だいじょうぶか！？」

「ええ」

「はい」

「よかった。気をつけろよ。まだ陰に潜んでいるかもしれない。」

「はい。それより気になることが・・・」

「それよりって・・・でなんなんだ気になることって？」

「銃はまだありますか？」

「ああ。あるがそれがどうした？」

「できれば一丁譲ってもらいたいんですけど、ダメでしょうか？」

「あ・・・いいぜ。ほら」

京谷は健斗に銃と弾丸五発を渡した。
健斗はもらった直後に銃に入ってる弾を数え始めた。
服装も軍服ということだけあって、雰囲気はまるで軍人だった。
自衛官を父に持つ京谷が言うのだから本当だろう。

「んじゃ車選びに戻りますか。」

それから数分後・・・

「これよくない？大きいし強そうだし。」
といって美咲が目を止めた車はハマーという車だ。
細かい種類もあるようだがさすがにそこまではわからない。

「いいですね。」

「よしじゃあこれの鍵はどれだ～」

「全部試しましょう。」

「時間がかかるな。」

「しょうがないわ。とにかくやりましょう。」

十分かかった。

「け・・・結構時間かかるのね・・・」

「だから言っただろ。でも鍵もわかったんだ、さぁ入ろうぜ。」

早速ハマーに荷物を積み始めた。
荷物というほどのものはないが一応車に積み込む。
結果車に入れられたのは京谷と健太の食料や飲料水、医療品などが詰め込まれたバックだけだった。
そして運転席に京谷が乗り込む。

「あんた運転できんの？」

「映画みたいな技はできないが一般人並みにはできるぜ。」

そして全員が車に入ったことをミラーで確認すると京谷はアクセルを踏んだ。

「でさこれからどこに行くの？人を助けるっていったてそうそう出会えるわけじゃないし、ガソリンにも限りはあるし・・・」

「じゃ・・じゃあＯＯＯ駐屯地へ連れて行ってくれませんか？」

「助けてくれるかわからないぞ？」

「いいえ実はその駐屯地の近くに住んでる友達からの報告によると内部感染が起こったそうなんです。駐屯地内でね」

「じゃあなおさら行く理由がないじゃないか。」

「いいえあるんです。」

「なんだ？」

「武器ですよ。へへへ」

「でも、内部感染が起こったんだろ？なら武器はどうやって手に入れるんだ？その前に入れるのか？中に」

「ええ。さっきも言ったんですが、今は内部感染が起こってるんですあそこは。だから入り口を守ってる兵士だって今頃逃げてるか「アレ」の餌になったかのどちらかです。」

「なるほどな。」
（だけどそれは仮説であって事実じゃない可能性も・・・）

「疑ってますね？証拠ならありますよ。友達が基地に侵入したときにすでに兵士の姿はなかったそうですから。「生きてる」兵士の姿はね。」

「その仲間は今どうしてるんだ？今も連絡可能か？」

「無理です。彼は「アレ」のおなかの中です。」

「死んだのか…」

「はい・・・でも彼のおかげでいい情報が手に入りました。」

「まさかお前が命令して行かせたんじゃねぇだろうな！」

「そ・・・そんなことはしてません！彼も今の僕と同じ考えだったそうです。」

「そ・・そうなのか。ならいいんだ。」

「でも武器が置いてある場所まで近づけるかわからないぞ？」

「それに関してはいい策があります。へへへ」

「な・・なんだよ」

「一応確認しておきますが「アレ」は音に寄ってくるんですよね？」

「そ・・そうだが」

「それで十分です。」

「まぁいいか。で行先はＯＯＯ駐屯地でいいんだな。」

「いいわよ。」

「珍しく静かだったな。」

「あんたたちがじゃべりまくるから入るすきがなかったのよ！」

「お二人さん、ありがとうございます。」

京谷たちは駐屯地へ向かうことになった。
そして健斗がいう「策」とは何なのか？
まだ明るい道をエンジン音を響かせながら突き進むハマーは「アレ」を吹き飛ばしながら駐屯地を目指す。

欲望と死は隣り合わせ

やはり車は便利だ。
途中ガソリンスタンドに寄って、給油したのだが駐屯地に着くまでに二十分程度しかかからなかった。
今京谷たちの目の前には兵士の格好をした「アレ」が群れを成していた。

「健斗、ホントにこの中を進むのか？危険だと思うが・・」

「大丈夫です。武器を手に入れればこっちの勝利みたいなものですから。」

「とりあえず車で奥まで進みましょう。そこからは歩いて武器を探すことにします！」

「はいはい」

アクセルを踏み込む。
兵士が身につけている金具が当たってるのか、「アレ」を轢く度にガシャン！などと甲高い音が鳴る。

（車持つかな・・・）

京谷がそう思った時だ。

ドンッ！

フワ・・・

車が浮かんだ。

どうやら倒れていた「アレ」を轢いてしまったのが原因だろう。

「「「！？」」」

着地と同時に京谷たちに衝撃が走る。

「ど・・・どうしたっていうのよ！」

「わ・・・わからない！」

「とにかくここまで来たらもう止まれない！このまま突き進むぞ！」

それからも何度か車が浮かんだりしながらも走り続けた。

「ここらへんでいいです！」

止まった場所は、自衛官を父に持つ京谷ですらわからない場所だ。

（こいつは何でこんな的確に武器庫の在りかを探せるんだ？）

「なぁ健斗・・・」

「聞きたいことはわかってます。なぜ場所を知ってるかですよね？」

「あ・・ああ」

「昔、ここと違う場所ですが武器庫の場所がネット上に流れたことがあるんです。」

（しらなかったなぁ・・・）

「確かに駐屯地によって場所は異なるとは思いますけど参考にはなりますからね。」

「だからここに絶対あるとは限りませんが適当に探し回るよりはいいと思うんです。」

「ちなみにあと目星をつけてるのは二か所です。」

「説明どうも。じゃあ早速探しに行くか！」

「ええ！」
「はい！」

こうして京谷たちは車から飛び出した。
辺りには「アレ」がいたが、車で暴れまわったので数は減ってる。
それでも相手にしてると時間がかかるぐらいの数は居るので、静かに進む。

「あそこです。」

健太が指をさしたのはいろいろな車両が待機させられている場所の向こう側だ。
いま自分たちがいる場所よりはるかに「アレ」の数が多い。

「本当に大丈夫か？結構いるぜ。」

「大丈夫です。」

といって健斗はしょっていたバックをあさり始めた。

「これです。」

と言って取りだしたのは、武器でもなく携帯でもなく、ただの人形だ。

「サルの人形？」

「はい。これで敵を引きつけます。」

その人形には小さなシンバルが取り付けられていた。

「これってあれか？ゼンマイを回すと人形が動いてシンバルをたたくやつか。」

「はい。美咲さんから「アレ」の話を聞いたときから準備してました。」

（よく家にあったな・・・）

「とにかく使ってみましょう。効果があれば楽に探せるしね。」

「はい。」

ギリギリ…ギリギリ・・
ゼンマイを回す音が響く。
そして何回か回した後に

パンパンパンパン！

と元気よく人形が動き始めた。

「ウウウウウウウウ・・・・」

「アレ」が一斉に京谷たち、正確には人形を目指して動き始めた。

「よし！」

「やったあ！」

「じゃあ今のうちに行きましょう！」

人形を置いて一斉に走り出す。
途中京谷たちの足音に気づいて振り返ろうとしたやつはバットで殴り飛ばした。

「ついた！」

「なんで武器庫の扉が開いてんだ？」

「兵士が武器を調達中に入ってこられたのでしょう。とにかく今はあるもの全部持っていきましょう。」

「あんまり欲張るなよ。必要最低限でいいんだ。いざとなったらバットだってあるしな。」

健斗が言っていたことはホントだったようだ。
武器庫の中にも「アレ」が数匹いた。
もちろん安全確保のために葬ったが・・・

「おい！すべてに鍵がかかってるぞ。」

「襲われてた兵士が鍵を持っているはずです。」

京谷は血で真っ赤に染まった兵士のポケットに手を突っ込んで漁る。

チャリン・・・

「あった！」

「じゃあ早速何処で使う鍵か調べましょう。」

次々と鍵穴に鍵を入れて試していく。

そして数分後・・・

「あいた！」

ガチャッ

そこにはそれぞれ一丁ずつ８９式自動小銃、９ｍｍ拳銃、５．５６ｍｍ機関銃、グレネードが少しと弾丸がたくさん入っていた。

「「「やった！」」」

「ドンドン開けましょう！さぁ！」

「鍵は一つしかなかったから無理だ、それにこんだけあれば充分だろ。」

「いいえまだ足りませんね。僕はもっとほしいんです、こんな機会はめったにありませんからね・・・」

そういうと健斗は拳銃を取り出す。

「おい待て！今撃ったら「アレ」が・・・」

タァンッ

遅かった。
外からは「アレ」が歩いてくる音がする。

「よし、開いた！」

「何やってんだ！こんな密閉空間で追い詰められたら終わりだぞ！」

「その時は撃ち殺せばいいんです。簡単でしょ？」

「お前…ッ！」

「ちょっともう来てるわよ！」

「くそッ！」

何も言わず三人はそれぞれ武器をとる。

「いいんですか？そんなにでかい物を使って。」

「こっちの方が弾が多いだろ。」

「確かにそうですがそれは反動が強いですよ。僕たちなら小銃の方でもきついぐらいなのにそんなに大きいのじゃより一層ね。」

「いいんだよ！とにかく撃てりゃあいいんだ！」

「来たわよ！」

「よし！全員撃て！とにかく脱出路の確保だ！」

京谷は驚いた。
確かに少しのブレはあるもんだと思っていたが、弾は思った以上に四方八方へ飛び散る。
肩への衝撃も強い。あと音が小さい拳銃とはケタ違いだった。

「く・・・くそッ！当たらねぇ！」

「だから言ったでしょ！これを使ってください！」

８９式小銃を受け取る。

（確かに多少のブレはあるがさっきのやつよりは当てやすい！）

「荷物をまとめろ！ここまで来たら持てる物はもっていけ！」

（なんか言うことがどんどん強盗みたいになってきたな・・・）

京谷と健斗が撃ち、美咲が武器を持つこになった。

「なにこれッ！重！これじゃあ走れないわ！」

「何個か俺が持つ！さぁいくぞ」

タァンッ！タタタタタタァンッ！タァンタァンタァァン！

銃声が鳴り響く中京谷たちは脱出を始めた。
しかし目の前には恐ろしい数の「アレ」の群れ、後ろは強固な武器庫の壁。
進むことしか許されない状況を悲観せず京谷たちは突き進む・・・

生還（前書き）

今までなんで感想が来ないのかなと思っていましたが、
設定のほうにミスがあり、ユーザーからしか意見を受け付けない設定になっていましたｏｒｚ
というわけで！
設定も直したのでこれからどんどん意見、ご感想のほうをお聞かせください！

生還

タタタタタタタタタァン！タァンタァンタタタタタタァン！

「撃てぇ！撃てぇ！撃てぇー！」

「くそッ！弾切れか！誰か弾薬をくれ！」

「はい！」

飛んできた弾倉を受け取る。

「くそッ！キリがねぇ！いくら弾がたくさんあってもいずれはなくなるぞ！」

「お二人さん、どこかに隠れてください！」

「「え？」」

「いいから早く！」

言われた通り物陰に身を隠す。

ピンッ

コンッ

次の瞬間爆音と肉が弾ける音が聞こえた。

耳がキーンとする。爆風で服が乱れる。それくらい衝撃は強かった。

「大丈夫ですか？」

「何をしたんだ！？」

「グレネードを投げました。さぁ！行くなら今です！」

「ああ！行くぞ美咲！」

武器庫から出る。
相当な威力があったのか、武器庫の周りには「アレ」が一匹もいなかった。

「よし車まで走るぞ！健斗援護は頼んだ。美咲は俺と健斗の間に入れ！」

「うん！」

「いくぞ！」

車に行くまで何度も爆発が聞こえた。
健斗が投げたのだろう。
京谷も銃で撃ちながら走り続ける。

「よし！車に入れ、さぁ早く！援護は任せろ！」

まるで戦争映画のワンシーンのようだったが、弾はうまく当たらな

い。
大体は肩や腹に当たってしまい、完全には倒すことができなかった。
しかし今は美咲たちが無事に車までつければいい。

「二人とも入ったな！」

辺りを確認すると、京谷も車に乗り込む。

ブォン

思いっきりアクセルを踏んだ。

「脱出成功ってとこか・・・」

「京谷さんこれからどこへ行くんですか？」

「健斗。」

「はい？」

「今度あんな真似したらお前は置いて行くからな。」

「え？」

「僕はただ装備を充実させたくて・・・」

「死んじまったら意味がねぇだろ！」

「・・・・・・・」

「俺は言ったはずだ。最低限のものだけでいいとな、それなのにお前は欲張った上に銃まで使って俺たちを危険な目にあわせた！」

「す・・すみません。」

「もう一度言うが今度あんな真似したらどこか適当な所に置いてく

からな！」

「はい・・・」

「わかればいい。じゃあ早速仕事を頼むぜ。」

「な・・なんでしょう！」

「現在所持している武器の数や弾数を数えておいてくれ。」

「はい！わかりました。」

「美咲、どこか行きたい場所とかあるか？友人を助けたいとかさ。」

「う～ん・・・じゃ・・じゃああいつの場所に行ってもらおうかなぁ・・・」

「あいつって？」

「長谷川悠樹（ゆうき）てやつなんだけど・・・」

「あいつ昔っから銃が好きでさ・・・別に軍がすきってわけじゃないから言うならばガンオタってとこかしら・・・」

「厄介そうだな・・・」

「でもあいつなら役に立つと思うの。銃に無駄に詳しいし。」

「よしわかった。そいつの家はどこだ？」

「ここからなら四十分位ってとこかな。」

「四十分!?ここから四十分ってまさか・・・」

「そう。あいつは都市部に近い所に住んでるの。」

「一気に都市部まで近ずくか・・・まぁいつかは行こうとしてたし別にいいが、車が「アレ」の群れの中を通って持つかどうかだな・・・」

「それでもう一つ頼みがあるんだけど、この近くに住んでる三浦優華(ゆうか)ってやつのとこまで連れてってほしいんだけど。」

「どうしてだ?」

「あいつ女なんだけど車いじりが得意なの。それこそ改造とかね。」

「で?」

「だから優華に車を強化してもらわない？」

「いいねぇ～。でもそいつが生きてるって保障はあんのか？」

「電話してみるわ。」

とても短い電話だった。
相手が死んでいたわけではない。美咲が必要最低限のことしか伝えなかったからだ。
要するにこんな感じだ。

数分前。
プルプルプル・・・
表情が明るくなった、相手がでてくれたのだろう。
すると、

「今から助けるわ。待ってなさい！」

そういうと一方的に通話を切って、満面の笑みをこちらに向けてき

て、今に至る。

「行けってか？まぁ言われなくても生きてる人がいるなら助けに行くけどさ・・」

「じゃあよろしく。道案内は任せてよね！」

「はいはい。」

「京谷さん、御話し中申し訳ないんですが武器の残量を数え終わりました！」

「別にそこまで丁寧な話し方じゃなくていいんだけど・・・まぁいい。でどうだった？」

「はい！まず使える銃器は８９式小銃は僕と京谷さんが持っていたのを合わせて二丁、９ｍｍ拳銃が一丁、もう一丁はたぶんグレネードの爆発せいでしょう。壊れていました。

あと５．５６ｍｍ機関銃は二丁とも無事です。その他グレネードが残り三つ、８９式用の３０発入り弾倉があと八つ、９ｍｍ用の九発入りのシングルカラム弾倉が九つ、
５．５６ｍｍ用の二百発撃てるリンクベルトが四つ、ちなみに５．５６ｍｍ機関銃は８９式用の弾倉も使えます。後はＳ＆Ｗ　Ｍ３７エアーウェイトが三つ。ざっとこんなものです。あとは鉄パイプ一つ、バット二つ、
僕が持ってきたシールドが一つくらいですかね・・・」

「お・・おう。ありがとよ・・・」

「すごいわね・・・」

「次は美咲さんのお友達を救うんですよね！楽しみです。あ！あと美咲さんはこれ使うといいですよ。」

渡してきたのは９ｍｍ拳銃だ。

「う～ん・・・」

「美咲さん、自分の体型に合った銃が一番いいんですよ。京谷さんを見ていてわかったでしょ？」

「悔しいが言い返せん・・・」

「そうね。それに基本私は打撃派だしね。」

「じゃあいくぜぇ！」

京谷はアクセルを踏み込む。
美咲の友達、三浦優華を救うために・・・

生還（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

休む暇などない（前書き）

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ１０９２ｚ／

上記のＵＲＬは僕の友達がやっている小説で、題材はおんなじです。

もし視聴者の皆さんの気が向いたら見てみてください！

休む暇などない

美咲の言う通りだった。
三浦優華の家に着くのに、十分もかからなかった。

「ホントにここか？これは車いじりが趣味のやつが住む家じゃねぇぞ。」

京谷が見ているのは閑静な住宅街の中で一際目立っている豪邸だ。

「あんたのお嬢様のイメージはもう古いの。今は私たちと何ら変わりない生活を送っているわ。強いて言うなら困った時にはすぐ御金を用意できることぐらいね。」

「へぇ～・・・まぁ確かにこの豪邸の中にあるガレージで改造できるならいいかもな。」

「じゃあ行きましょう。あ、ちょっと待ってて。」

というと美咲は車を降りて、門の近くに設置されている小さなインターホンのボタンを押す。

しばらくすると美咲は笑顔で帰ってきた。

「いいわよ。」

「優華が車から降りないでまっすぐガレージまで来てって言っていたからまた案内するわ。」

「敷地内もサーチ済みか・・・怖いな・・なぁ健斗。」

「はい・・・」

「何回か遊びに来ているうちに覚えちゃったの！」

雑談をしているうちにガレージに着いた。

中で待っていたのは車のオイルか何かで汚れた服を着ている女性だった。

たしかに服装はお嬢様っぽくないが、溢れ出るオーラというか風格が「私はお嬢様」と語っている。

「よう！美咲、やっぱり生きてたんだな！お前のしぶとさはゴキブ

リ以上だからな・・・」

（ボーイッシュな話し方だなぁ～）

「し・・失礼な！あんたこそお嬢様のくせによく生きていたわね。もうとっくに逝ってしまったかと思っていたわ！」

（車の中では俺のお嬢様に対するイメージは否定したくせに言ってることは俺のイメージと一緒じゃねぇか！）

「まぁ美咲も落ち着けって、電話した時はうれしそうな顔してただろ。」

「うるさい！」

「あら、あらあらそうなのぉ～？かわいそうに、寂しかったのね。」

ニヤニヤしながらからかっている。

「で優華さん、さっそくなんですがお願いできますか？」

「ええ、話は大体美咲から聞いたしね。準備は出来てるわ。あなたたちは家の中に入って待っててくれる？」

「いいんですか！？」

「下手すると半日以上かかる可能性もあるからね。私は趣味だからいいんだけど、あなたたちはただ疲れるだけだからね。」

「で・・・でわお言葉に甘えさせてもらいます。」

京谷は普段使ったことがないような言葉を言ったため、どこかぎこちなかった。

「たのんだわよ優華。」

「ええ。任せておいて。」

美咲の案内で豪邸へと入っていた。
家に入ってみると、まずは玄関の規模が違った。
広さはもちろんのこと、今歩いているのはたぶん大理石だろう。
こんな自分がここを歩いていいのか？と思いたくなるぐらい本当にきれいだった。

リビングはさらにすごかった。
またもや床は大理石。この家だけで世界の半分の大理石を使っているのではないだろうか。

（さすがにそれはないか・・・）

しかも、部屋の各所には壊したら一生かけて働かないと弁償できそうにないものばかりだ。

（ここの豪邸に引きこもってれば大丈夫なんじゃねぇか？）

危うくそんな発想まで浮かんでくる。
だが、京谷の目的はあくまでも人命救助。こんなところでのんびりはしていられない。

「んじゃ、休めるときに休んどきますかぁ。」

「じゃあ私はシャワーへ行ってくるわ。」

「おう。ってか健斗は？」

「アレいつの間に・・・ま、いいんじゃない？いずれ戻ってくるでしょう。それにこの屋敷から出ない限りは安全よ。」

「そうだなぁ～まぁいいか俺も休みたいし。」

こうして京谷たちはつかの間の休憩を各自やりたいことをして過ごした。
健斗はどこに行ったか結局分からなかったが・・・
三十分ぐらいたったら物音が聞こえた。
美咲が風呂から上がったんだろう。
京谷も疲れがたまっていたのかだんだんとまぶたが重くなっていく。
何時間経っただろうか、何処からか声が聞こえる。

「・・・にいる・・・・は・・・き・・くだ・・い・・」

「んあ？」

「ほらいくわよ？もうできたんだって。」

「早いなぁ～。」

「はぁ？結構かかってるはずだけど…」

「何分くらい？」

「何分って・・・まぁいいわ。五時間よ。」

「！結構かかってたんだな・・・」

（寝てて気付かなかった・・・で結局健斗はどこに行ったんだ？まだ姿は見えないけど。）

「じゃあいくか。」

「ええ。」

意識がボーっとしているため、ガレージへ行く途中の記憶がところどころ消えているが、とりあえずガレージには着いた。

「「お・・おお！」」

京谷のぼーっとしていた意識が一気に覚醒する。
車の変化はすごかった。

「まるで軍の車両だなぁ。」

車は全体的に厚みを増した気がするし、なんといっても車の上部に取り付けられている機関銃は「普通の人間」が見たら、怯えて逃げ出すぐらいの威圧感を放っていた。

「でもあんなものどこに・・・」

「僕たちがとってきたじゃないですか。」

「おお！健斗、こんなところにいたか。」

「ええ。ちょっとやりたいことがありまして・・・ここで手伝っていました。」

「しっかしすごいなぁ。よくここまで出来たもんだ。」

「はい。何といっても機関銃を取り付けたところはナイスでしょう

！ねぇ！」

「ああ！車に固定されてるなら当たりやすくなるしな！」

「はい！これで撃ちまくれます！ほかにもですねぇ！・・・・・」

「すごい盛り上がってるわねぇ・・・」

「あの健斗って子面白いわねぇ・・・車にも結構詳しかったし。」

「そ・・そうなの！ま・・まぁありがとね。おかげで先に進めるわ。」

「どこにいくの？」

「幼馴染の悠樹ってやつのとこよ。あいつの住んでいるところは都市部に近いからきっと「アレ」が多いと思ったからあんたに車の強化を頼んだのよ。」

「へぇ～楽しそうねぇ。」

「ちょっと・・・ゲーム見たいに言わないでよ。結構疲れるのよ？」

「普段はあまり動かないし行きたいなぁ～」

優華は笑顔で言ってきているが体から出てくる「反論は許しませんよ？」というオーラみたいなものは消し切れていない。

「はぁ～あんたは何言っても聞かないでしょう・・・京谷がいいって言ったらいいわよ。」

「あ、じゃあもう決まりね！」

「まだ聞いてないでしょうが！」

「さっき聞いておいたのよ。　　（寝ているときに）」

「最後聞こえなかったんだけど！ねぇ！」

「じゃあ行きましょう！ほらほら美咲も。」

「ま・・まあいいわよ…仲間は多い方がいいしね。女子も少なかったし。」

京谷たちの元へ近付くとまだ車の装備で盛り上がっているようだ。ホント男ってのは単純なことで盛り上がれる特別な生物だ。

「ほら、さっさといくわよ。」

「はぁ？今日はここに泊るんだろう？外は暗いしさ。」

「何処まで図々しいのよ！？そもそも悠斗も明日には死んでいるかも知れないってのよ？」

「今生きてるかもわからんだろ。」

「あ・・・」

「そういうことも含めて今日はここで作戦会議も含めた休憩にしようぜ！いいですよね？優華さん」

「ええ。もちろん。」

「ちょ・・・ちょっと優華まで・・・」

「疲れた状態で出て行って全員そろって共倒れするよりはましでしょう？それに車のメンテナンスももう少しあるしね。」

「というわけだ。いいだろ美咲。」

「・・・わかった。明日こそ行きましょう。」

「もちろんだ。」

そして各自の自由行動が始まる。
京谷と健斗は射撃練習。（場所は広い敷地の一部を借りてやっている。）
優華はもちろんガレージでメンテナンス中。
優華はむしろ休憩している時よりも顔が活き活きしている。
美咲は部屋に行ったのか。敷地内には見当たらない。
こうしてまた一日を終えることになった京谷は安心している半面こんな普通のことがここまで愛おしくなる位にまで状況が急速に変化していることに焦りも感じていた。

（明日こそは美咲のもう一人の友達を助けなきゃな。）

っタン！という銃声が鳴り響く中京谷はひっそりとそんなことを考える。

しかっりとした眼差しを射撃の的に向けながら・・・

部屋に戻ったのは十一時位だ。これからシャワーへ行ったりすると

なると寝るのは十二時は超えるだろう。

やっぱり十二時近くになった。

（ふ～やっと寝れるぜ。しかもかなり上質な布団に！）

ピー！ピー！ピー！ピー！

甲高い音が鳴り響く。

「！？」

戸惑いながらも京谷は確実に武器を取りに動いていた。

休む暇などない（後書き）

もしかしたら見てくださってる方には、車に詳しい方がいらっしゃるかもしれませんね。
そしてその人は「そんな改造できるわけねぇダロ！」と思っているかもしれません。
たぶんそのとおりです。
ただそこはフィクションということでお許しいただけないでしょうか？
他にも現実ではありえないことが書かれてるかもしれませんがお許しください・・・・

決意（前書き）

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９３３２ｙ／

上記のＵＲＬは前紹介した人とは違う人です。

ぜひ見てみてください！

あと、意見・ご感想のほうも遠慮せずどんどん書き込んでください。

それではごゆっくりお読みください。

まぁそんなに長くはないんですが・・・

決意

どこからか音が響いている。
何処からかというよりは、この家から音が出ている。

「な・・なんだよ。せっかく上質な布団で寝れそうだったのに！」

といいつつも手には武器がちゃんと握りこまれていた。
ポケットには三つのマガジンと、一つのグレネード。

「昨日は素直に寝かせてくれたじゃねぇかよ・・・・」

その時扉が勢いよく開かれた。

「侵入者よ。数こそ少ないけれど侵入経路を塞いでおかないとまた来るわ。」

「わかってる。今から行こうとしてたところだ。で、場所は？」

「ガレージの近くよ。」

「車の状況は？壊されたりしてないよな？」

「それは心配しなくていいわ。シャッターは閉まってるし。」

「でもいつまでもつかは分からないよな・・・」

「ええ。だから急ぎましょう。」

ガレージまで走る京谷たち。
二、三分程度でガレージには着いた。

「大丈夫か！？」

美咲に無事だということ確認しておきながら、自分でも確認してしまう京谷。
意外に仲間思いである。

「ええ。無事よ。」

「京谷さんたちも無事でしたか・・・」

「よし。なら今から侵入してきたところを塞いでとにかく明日までは耐え抜くぞ！」

しかし、健斗と優華は不敵な笑みを浮かべながら京谷が予想していなかった言葉を告げる。

「その必要はないわ。」

「え？」

「もう出れますよ！京谷さん。」

「まじか！？」

あまりにも突然のことで驚く京谷。
無理もないだろう、京谷がガレージから出て自由時間を過ごし今に至るまでに一、二時間と行ったところだ。

「じゃ…じゃあ今すぐ美咲の友達を救いに行くか！」

「ええ！」
「はい！」
「わかったわ。」

車に乗り込む美咲たち。

「あ・・あれ？優華さんはこっちでしょ？」

運転席を指差す京谷。

「ごめんね。運転はできないの…」

「いえいえ！別にいいんですよ。ここまで来る間も僕が運転してたんで。」

こうして全員車に乗り込んだところでガレージのシャッターがゆがみ始める。

（まずいなぁ・・・）

「健斗！」

「はい！わかってます！」

真っ先に車の天井のふたを開け、銃座に就く健斗。

（そういえばあの穴はどうやって開けたんだ？部屋にいたおれたちには一切音は聞こえなかったけど・・・）

ミキミキッ！

「そ・・そんないるのか！？」

「いきますよぉ～」

目を輝かせながら銃のグリップを握る手に力を入れる健斗。

「撃てぇえ！」

健斗からの返事はなく、京谷が「う」と言い始めた時には撃ち始めていた。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダーン・・・・・・・・

「今です京谷さん！」

「おう！」

アクセルを踏み込む。
直後、強化された車両はガレージのシャッターを紙屑のように吹き飛ばして庭に出た。

「や・・・・やば！門がふさがってるぞ！」

「「！！！」」

優華は携帯みたいな端末を取り出し操作する。

その瞬間門が開き始める。

（なんつーか・・・ハイテクだな、この家って。）

「そういや美咲！これからどっちに向かえばいいんだ？」

「とりあえず右。あと優華の家からなら近道を使えば十分ぐらいで着くわ。」

（車って便利・・・）

「ってかついに都市部に近付くんだな・・・」

「ええ。」

「優華さん一応言っておきますけど、この世界はもうゲームみたいになっています。俗に言う殺るか、殺られるかです。
嘘みたいですがこれは本当で敵は弱点である頭を的確に狙うか再起不能になるまでバラバラにするかの二つしか、対抗する術は今のところありません。」

「ええ。わかってるわ。それを承知で付いてきたんだから。」

と言いつつも優華の体は微弱に震えている。

（強がってはいるけど優華さんも女だからな…俺と健斗で守るしかないよな！）

「じゃあ飛ばすぜ！」

一応燃料メーターを確認しておく。
マックスまで燃料は入っていた。

「あ！そうだ私も一応言っておくけどガソリンの予備はあるからいざとなったら使ってね。」

（なんで自分では運転しないのに家にガソリンなんてあるんだ？）

「は…はい。ありがとうございます」

（抜かりねぇな・・・しかも探してたバットとかバックがすでに積み込まれている・・・）

「京谷そこ左！」

「了解！」

また一人仲間が増えた京谷チームは次の目標は美咲の幼馴染である悠樹を救うことに定め、夜の街をエンジン音を響かせながら突き進む。

決意（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました。

大きな一歩（前書き）

だんだん投稿する間隔が開いてくると思いますが、
何卒よろしくお願いいたします。
ではごゆっくりお読みください。

大きな一歩

優華の家を出てから十分ぐらいたった。
もう都市部に入ったからか、見渡す限りは「アレ」ばかり。
それでも美咲が近道を教えてくれるため、あまり「アレ」がいない道を通ってこれた。
だがもうそろそろ美咲の案内も聞かなくなるだろうと京谷は考えていた。

（いくら散歩が好きだからって自分の家から何十キロも離れた都市部までは来ないだろうしな・・・近道ももうそろそろ無理か。）

「えー・・とそこは右！じゃなくて・・・左よ！」

（やっぱり段々曖昧になってきてる・・・まぁ今まで案内してくれただけでもありがたいか。）

「あ！ここよ。ここが悠樹の家だわ！」

「本当か？」

京谷がそう聞き直したのには理由がある。

美咲が言うには今前方にある一般的な家屋が悠樹が住んでいる家らしいが、京谷は中に生存者はいないんじゃ？と思っていた。
なぜなら、ガラスは割れていて玄関の扉も無造作に開けっぱなしになっており、真っ白にきれいに塗られた壁には所々に黒ずんだ血が付いていたからだ。
美咲はそんな家を指差しながら「ここよ！」というのだ。
中に生きた悠樹がいるなんて今車にいる美咲以外誰も考えていないだろう。

「じゃあ早速行きましょうか。悠樹を助けにね。」

「おう・・・」

（も・・もしもだが死んでいた場合はどうするんだろうか・・・・周りが見えなくなって敵に突っ込んで行ったりしないだろうな・・・・）

「健斗は銃座について待っていてくれるか？いざとなったら援護してほしいんだが・・・」

「了解です！」

「よし。じゃあ各自装備を確認するんだ。いきなり銃は使うなよ、少ない数ならバットとかで十分だからな。」

「「ええ」」

こうして悠樹救出のために家に入り込んだ三人は愕然とする。
家の中は外よりもひどく、辺り一面血だらけで壁紙もボロボロだ。
「アレ」は音がない限り攻撃はしないので、壁紙の傷は住人が抵抗した後であろう。
すると、ここにきてようやく現実が見え始めたのか、美咲が何かブツブツ言い始めた。

「悠樹が死ぬなんてありえない・・・・悠樹が死ぬなんて・・・・・・・・」

（おいおい・・女って精神面は男より強いんじゃないのか！？まぁこんな状況だしな・・・常識なんてもう通用しないよな。）

「おい美咲。まだ死んだってわけじゃ・・・・」

「うるさい！」

（フッ！そう来ることは予想済みだぜ美咲さんよぉ！）

「ゴチャゴチャ言ってんなら車に戻れ。足手まといはいらねぇんだよ。」

（健斗、お前を車に残したのは足手まといだからってわけじゃねぇからな。）

「・・・・・・」

「後は俺と優華さんで行くからお前は戻ってろ。付いてこられて三人が共倒れなんて御免だからな。」

「そ・・そこまで言わなくてもいいんじゃない京谷君？」

（優華さんすみません・・・これも美咲のためなんです！）

「わかったわ・・・」

（お！意外に素直…）

「ただ絶対に連れてきてね。」

「死んでたら元も子も・・・・」

京谷がそういうとゆっくりと美咲は振り返り銃を向ける。
今のは京谷でもミスった！と思っていることだろう。

「そういうのが困るっていってんだよ。ジョークだよジョーク。必ず助けて見せるって、安心しろよ。」

「そう・・・・」

（よ・・・よかったぁ～ジョークって言って許してもらえるなんて器でけぇんだか馬鹿なんだか・・・まぁとにかく美咲様様だな。）

美咲は車に帰っていた。
しーんとした家にまるで取り残されたような感覚に陥る京谷と優華。

「さっきのは言いすぎじゃないかしら？」

「俺も思います、でもいまが肝心なんですよ。このつらい時をいかに乗り切れるかがね・・・」

（といっても見知らぬ人たちの死であんなに感情的になる俺が友達の死を目にしたらどうなるんだろ・・・・）

「と・・とにかく家全体を見て回りますか。」

「ええ。」

さっきも言ったがこの家は優華のような豪邸ではなくごく一般的な大きさの家で、調べるのは何の苦労もない。
強いて言うならいつ来るかわからない「アレ」に対していつも警戒していなければいけないというのが辛いぐらいだろう。
しかし苦労がまた一つ増えることになった。

「なんであんなに！？どこに潜んでやがったんだ！」

「とにかく今は隠れましょう。」

普通なら真っ先に外へ出るべきなのだろうが、玄関付近にも「アレ」はいつの間にか湧いていた。
なので現在は二階へ避難中である。

「よしここに入ろう！」

一番奥の部屋だ。

「急ぎましょう。」

「はい！」

京谷はドアノブを握ると同時に体を前へ進ませた。

ゴンッ！

開かない。

「なぜ・・・？」

優華が疑問に思っているときに京谷は次の行動へと移っていた。
バットを頭上へ掲げる京谷。
次の瞬間には振り下ろしていた。

「らあぁ！」

ガシャァン

ドアノブはいとも簡単に壊れた。

だが京谷が次に取った行動は意外だった。

「いくぜぇ！」

ドン

ドン

ドォン！

「よし！」

扉へのタックルだ。

（ドアノブ壊した意味はあったのかしら・・・）

中へ入ってみると一階とは違いきれいなままだった。
床にはＢＢ弾などが転がっている。

（まさかここが！）

そのとき突然押入れを開けるような音と共に、黒い影が京谷の目の前に飛び出す。

「俺は簡単にはやられないぜ！一匹、二匹なら道連れにしてやるからなぁ！」

などと台詞を言いながら襲いかかって来た物体に向って京谷は冷静にバットを突き出す。
あとはその物体がこちらに来る速度によって威力は決まる。

「ごはぁ！？」

クリティカルヒットだ。
バットは襲ってきた物体の腹にめり込んでいる。
ニヤニヤしながら京谷は襲いかかってきた物体（別名悠樹）に向かって歩きだす。

「ちょ・・・ちょっと待って・・・お前ら人間だろ。襲いかかってから初めて気づいたんだ…許してくれ・・・」

「いやー俺はただどこかの悠樹君のせいで銃を向けられただけで君に何の恨みもない健全な人ですよ？許してくれだなんてまるでこっちが悪いみたいじゃないか。」

「なぜおれの名前を・・・あ！いやなんでも…」

「ん？なんだって～？」

さらにニヤニヤしながら問いかける京谷。

「遊んでいる暇はないわよ京谷君！もう来るわ！」

「はいはい。」

倒れこんでいる悠樹にすっと手を差し出す京谷。
初めからこれならかなりの紳士という印象を悠樹に与えられただろう。

「んじゃあ美咲も待ってることだしさっさといくか。」

「美咲が！？」

「ああ。あいつのおかげでお前は助かった様なもんだぜ？」

「今はどこに！？」

「車だよ。今からその車に向かうお前はこれを使え。」

京谷が渡したのは８９式小銃とマガジン三つだ。

「！！！」

「礼なら健斗ってやつに言えよ、車にいるから。だから今は車まで戻るんだ。」

「了解！」

（健斗といい悠樹といいなんで「了解！」なんだ？）

「じゃあここから降りましょう！丈夫なロープもありますし準備は万端です！」

「お・・おう」

（丈夫なロープって・・あからさまに怪しそうじゃねぇか！ってかなんでこいつまで敬語に！？）

こうして無事二階から一気に庭まで下りることができた京谷たちは車に向かって走った。（ロープは本当に丈夫だった）

「京谷さん！無事だったんですね、さぁはやく！」

ダダダダダダッダダダダダダダダダダダダ・・・・・・・

健斗が握る軽機関銃が火を噴く。
自分に当たらないかひやひやする。
そんな中でも目を輝かせているやつがいる。
悠樹だ。

（いくらガンオタだからって自分の近くを通る弾丸が怖くないわけないだろ！）

だが悠樹が見せる表情は恐怖でも怒りでも悲しみでもなく（悲しみはないか・・・）喜びだ。
見てるこっちが身ぶるいしてしまいそうなぐらいだ。
だが、周りを見ていられるだけの余裕ができていることに気づいてない京谷も凄いもんだ。

「よし！二人とも早く入れ！」

ひと足早く着いた京谷が窓を開け、車から叫ぶ。

敵は四方八方から近付いていた。

「全員乗ったわ！」

美咲の掛け声を聞いた瞬間に京谷はいつもの通りアクセルを踏み込む。
車は家に向かってではなく、道路に向かって止めていたのですぐ出れた。
まだ京谷の加速方法に慣れていない悠樹はシートに顔面を強打する。

（ざまぁ～）

ミラー越しに美咲に睨まれている気がしたのでそんな考えは払拭して道路を突き進む。

現在時刻十二時四十分。
目標もなく進む車は暗い夜の街にエンジン音を響かせる・・・・

大きな一歩（後書き）

読んでくださった方、本当にありがとうございます。
そしてなんと！
皆様のおかげで、ｐｖ数は１０００を突破し、ユニーク数も１５０を超えられました！
本当にありがとうございます！
これからもよろしくお願いします。
あと、意見・ご感想もどんどん書き込んでください！

馬鹿三人

あれから京谷たちは次の目標をどこにするかで迷っていた。
もちろん車は走らせたままである。

「やっぱり今日はもう休んだ方がいいんじゃないか？」

「でもあんただって友達は救いたいでしょ？」

「確かにそうだけど今日はいろいろあって疲れたろ、それにこの車だってこれ以上人を入れられるとは思えない。」

「確かにそうだけど・・・」

「だから今日はもう休んで明日もう一台車を入手してから救出すればいいだろ。」

「もう一台って、だれが運転すんのよ？」

「悠樹に決まってんだろ。」

「え！まだペーパーなのに・・・・」

「え？なんか言った？」

「いいや！光栄ですって言ったんですよ・・・はぁ・・・・・」

（こいつはホントいじりがいがあるなぁ・・・）

「ま、というわけでドライバーは確保できたんだ、後は車だろ。」

「そ・・そうね。じゃあ今日は休みましょうか。」

「いったいどこで？」

優華のひとつの質問で車内はシーンとなった。
無理もないだろう、もうここは都市部で周りは「アレ」だらけで安全な場所なんてそうそうないし、もしあったとしても先客がいるかもしれない。
車内で寝ようにも、二、三人ならまだしも今車内にいるのは五人だ。とてもじゃないが疲れが取れるとは思えない。

「じゃああそこなんてどうかしら？」

優華が指差したのは警察署だ。
五階建てでなかなかの大きさのものだ。
残念だがが先客がいないとは思えない。

「たぶん無理だと・・・」

「行ってみましょう。」

みんながそんな目で俺を見ているのがミラー越しに分かった。

（こんなの拒否できねぇじゃん！）

「わかったよ！でも車はどうすんだ？」

「車のままで突っ込んでもいいわ。」

「は？」

「私が改造したのよ？そこらへんの屑が改造したのとは違うの。」

（そんなこといわれてもなぁ～）

「でも限度ってものが・・・」

「いざとなったら僕が機銃で警察署の門でもシャッターでもなんでも吹き飛ばしますよ！」

「わかったよ・・・」

そういって方向転換してアクセルを踏み込む京谷。

（やっぱり怖いぜこれ！）

でも時すでに遅し。

この車の速度なら後二十秒ぐらいで警察署に激突だ。

（腹をくくるか・・・）

「みんな！衝撃に備えろ！突っ込むぞ！」

ガシャーン！

ドーン・・・

パラパラパラ・・・・・

余裕で警察署に入れた。

（この車両普通に軍の車両より強いんじゃねぇか？）

「私を崇めなさい！この愚民共め。」

そう言って満面の笑みを浮かべる優華。
そしてそれに苦笑いしながら参加する三人。

（安心したんだな・・・）

「健斗！安全確認するぞ！」

「了解です！」

「俺もお供します！」

京谷たちは階段を上っていく。

「ってかあいつら馬鹿三人の無駄な連携力は何なの？しかもリーダーは京谷みたいだし。」

「楽しそうで何よりじゃない。まぁ私たちは一階の安全でも確保し

ておきますか。」

「そうね・・・」

こうして自動的に二手に分かれることになった京谷たちは各自作業を始めていた。

二階の京谷たちは・・・・・

「やっぱり怪しいのはここか・・・」

「ええ。そうみたいです。」

「どうやって入ります？鍵がなきゃ無理みたいですけど・・・」

三人が止まっているのは武器庫前である。
やはり銃は男のロマンなのだろうか？
はじめは音が出ると嫌がっていた京谷も、安全な場所ではやはり銃がほしいらしい。

「壁にグレネードを投げましょうか。」

「跳ね返ったら俺たちは仲良くひき肉になるぞ。」

「じゃあグレネードにガムテープをつけて壁にくっつけましょうか！」

「「お前は神か！」」

戦いの場では冴えている京谷の脳も普段はこんなもんだ。

「ちょっと待っててください・・・」

鞄をあさる健斗。

（あの鞄は四次元ポケットなのか？なんでも出てくるなぁ）

数分後・・・・

「できましたぁー」

「よし！作戦開始だ！」

「「イエッサー！」」

京谷の号令で武器庫の近くまで走っていく健斗。
そして健斗がグレネードをくっつけたのは扉ではなく、その近くの壁だ。
理由は単純に壁の方が叩いた時の音が軽い気がしたから、脆いんじゃね？と予想したからである。

「隠れて！」

ボーン！
パラパラ・・・・・・

「「「ッシャアー！」」」

こうして馬鹿三人は武器を手に入れた。

一階の美咲たちは・・・・・

「なんていうか・・・想像道理の警察署って感じね。」

「まぁそうでしょうね。ここは警察署ですし。」

「とりあえず裏口は机とかでバリケードを作っときましょう。」

「そうね・・・」

「なんていうか平和が一番なのはわかってるけど、これはこれでつまらないわね。」

「そうね。さっきあの馬鹿たちはなんかまたやったみたいだしね。」

「こっちの作業が終わったら合流してみましょ。」

「じゃあ早く終わらせますか！」

「ええ！」

京谷たちは安全地帯を手に入れた。
しかし京谷にはまだ救うべきものがある。
その目標をクリアするには明日まで生き残ることが絶対条件。

こうしてまた、京谷の戦いは終わり朝になったらまた始まる、この急速に変化する世界のルールに京谷たちはいつまで耐えられるのか・・・・

準備（前書き）

毎度毎度見てくださっている方、ありがとうございます。
ひどい文ではありますが、これからも投稿していきたいと思っているので
応援よろしくです＾＾

準備

「ちょ・・！ちょっと！なにやってんのよ？」

美咲たちは現在京谷たちと合流して、破壊された壁から出てくる馬鹿三人の姿を見て愕然としている。
無理もないだろう、武器庫から出てきた京谷たちは全員ニヤニヤしながら手のひらサイズくらいの箱をたくさん持ってきていたのだから。

「いや～マジここサイコーだぜ！弾しかなかったけどそれでも十分だよな！」

「「ええ！」」

（この馬鹿どもは・・・）

「まぁいいわ。そういえば一階には警官の死体はなかったけど全員逃げたのかしら？」

「「「・・・・・・」」」

三人が唐突に黙る。

（この反応は・・・）

「あの…もし死体があったならそこから武器を調達したいんだけど・・・」

「あ！優華さんは何も持ってないしな。」

「俺も持ってないっす！」

（そういや忘れてたな・・・二人分の武器か・・・・・）

「健斗。車まで行って俺が苦手な奴持ってきてくれないか？」

「苦手な奴？・・・・・・・あ！了解しました！」

そういって笑顔で走り出す健斗。
みんなの表情は「苦手な奴ってなに？」といった感じの表情だ。
一番初めからいる美咲ですらその表情を浮かべている。

「京谷さーん。これですよね？」

健斗が帰ってきた。
健斗の手の中には何か大きな物が抱えられている。
その正体は・・・・・

「5．56mm機関銃じゃないですか！？」

やはり悠樹が一番早く気づいた。

「こんなのあったんですか！？いいなぁ～」

「だからこれはお前が使え。」

「！！！」
「い・・・いいんすか？」

「俺や健斗じゃまともに当てられないんだよ・・・それなら少しでも可能性があるやつに使わせた方がいいだろ。」

「あ・・ああ・・・ありがたやー！」

（こうやって部下を増やしているの？京谷。）

そしてちらりと隣にいる優華を見る。

（もしかしたら私にも部下ができるかもしれ・・・・・）

「無理よ。あなたじゃ無理。」

（超能力者め・・・・）

「そんなんじゃないわ。」

「優華さんさっきから何言ってんですか？」

「いいえなんでもないわ。」

美咲は考えることをやめた。
そんな美咲に向かって優華は一言言った。

「あんた単純すぎよ。表情にすぐ出てくるんだから。」

（だからって普通は無理でしょ・・・・）

「何年友達やってると思ってんの？」

「十年以上・・・・」

「おい。二人とも聞いてんのか？」

京谷が唐突に話しかけてきた。

「え？なにが？」

「って何一つ聞いてなかったのかよ！まぁいい、初めからもう一回話すからよーく聞いとけ。」

京谷の話をまとめるとこうだ。
まず優華の武器は京谷がサブとして使っていたＳ＆Ｗ　Ｍ３７エアーウェイトを渡すことにした。
後は手分けして二階の安全確保。
なぜもう一回やるのかというと、京谷たちは二階に上ってすぐ近くにあった武器庫に引きつけられて、
二階の安全確保はまるでやっていなかったからだ。
さっき死体がないことについての質問に答えられなかったのも、これが理由だ。

「…というわけだ。」

「屑。」

「美咲・・・お前は一人で一階にいるか？」

「だってそうでしょう！私たちは汗かいてまでバリケードとか作ってたのにあんたらはニヤニヤしながら好きなことやってたんでしょ！」

「女ってのはいちいちなんかいわねぇと行動できねぇのかよ？」

「まぁまぁ、二人とも落ち着いて。今は安全確保が優先でしょ？二階も入れれば四階分の安全を確保しなきゃいけないんだから。」

「さすが優華さん！わかってらっしゃる。どこかのおバカさんとは格が違ってらっしゃる。」

「あら、やっぱりわかる？」

「誰が馬鹿よ！」

「俺美咲が馬鹿だなんて言ったか？」

「あ！・・・・・」

四人の眼差しが美咲に突き刺さる。

（くッ！はめられた！）

「で…でも流れ的に私のこと言ってるでしょ！」

「ホント女って食い下がるってことはしらねぇんだな・・・・」

「もういい今回は俺の負けだ。とにかく今は安全確保を優先しよう。」

（安全の確保が最優先ってサボってた俺がいえる言葉じゃないな・・・・）

「二人一組でチームを組め！」

「一人あまりが出ますよ？」

「俺は一人で行く。」

「「「「！！！」」」」

「なぁにいざとなったら呼ぶよ。でもさっきの爆発でなにも来ないということは「アレ」はいないと思うんだがな。」

「そ・・・そう。」

「じゃあ各自取りかかってくれ！」

「「はい！」」

「「ええ！」」

こうして京谷たちは二階での安全確保を始めた。

準備（後書き）

読んでくださった方ありがとうございました！
そういえばもうそろそろ固定客みたいな感じの方が出てくる頃でしょうか？
まだ早いですね＾＾；
とにかくこれからもがんばりますので、意見・ご感想または文の評価、ストーリーの評価などもよろしくお願いします。

殺戮（前書き）

お気に入り登録してくださった方、見てくださった方、ありがとうございます！
それでは、ごゆっくりお読みください。

殺戮

あれから数分間二階を見て回ったが、使えそうなものもなければ、
「アレ」を見かけることもなかった。

「なんていうか拍子抜けだな・・・」

再び武器庫の前に集まった京谷たちはそんな事を話してた。

「でもまだ三階あるのよ？」

「この調子でサクサク進んでくれるとうれしいんだけどな・・・」
「なんかお約束のパターンとか来そうで怖いなぁ・・・」

なんてことを話しながら三階へ向う京谷たち。
そしてお約束のフラグ回収。

「ちょッ！どっから出やがった！？まさか俺があんなことを言ったから無駄なフラグが・・・！」

「うっさいわね！現実にフラグなんてあるわけないでしょ！ただ単に音に寄ってきただけでしょ！」

二人して大声を出して「アレ」を引きつけていることをまるで自覚していない京谷と美咲。

「戦いは避けられないな・・・」
「健斗！悠樹！俺の援護は頼んだ、美咲と優華さんは自分の身を守っていてくれ！」

「守れってあんた、この中で一番危ないのはあんたなのよ！？」

「なんで？」

本当に分からなそうな顔をしている京谷。

「あんた遠距離武器持ってないでしょ。」

「そんなことかよ・・・元々俺は近距離武器使ってたろ。」

「今と前じゃ状況が・・・」

「それに鉄パイプもあるし二刀流だぜ。」

そう言って京谷は鉄パイプとバットを手に取り満面の笑みを浮かべる。

「「「「・・・・」」」」

（（（（この人この状況を楽しんでない！？））））

「何だお前たちその顔は、ほらもう「アレ」が迫ってきてるぞ。」

そのあとは京谷無双だ。
鉄パイプとバットを振り回しながら「アレ」の群れへ突っ込んでいったが、
途中で鉄パイプは捨てていた。
両手でしっかり持たないと威力が小さくなると思ったのだろう。
残りはあと数体といったところか。

「悠樹・・・後は頼んだ・・・もう眠いよ・・・・・」

というと階段の方へ向かっていき、階段に座った後は動かなくなった。

「どういう神経してたらこんなときに寝れんのよ！」

（（あ、寝たんだ。））

悠樹と健斗は死んだと思っていた。

「まぁ車の運転とかもしてたんだし疲れたんでしょ。」
「さぁみんな！リーダーの安眠を守るわよ！」

といって銃を撃ち始める優華。
彼女には一度安眠について詳しく教えた方がいいかもしれない。
だが、銃声を聞いても起きない京谷も少しおかしいだろう。

数分後・・・・

辺りは血に染まっていた。
もちろん美咲たちの血ではない、「アレ」の血だ。

「今日はもう寝ましょう、京谷も寝ちゃったし。」

「でも上から「アレ」が来るかもしれないですよ！？」

「だから四階へ続く階段には軽くバリケードを作りましょう。」

「なるほど、じゃあさっそく取り掛かりますか。」

「ええ。」

更に数分後・・・・

「できた！」

「で、京谷さんはこのまま寝かせておくんですか？」

「そうしましょう。」

「でも体が冷えるんじゃ・・・・・」

「そうしましょう。」

美咲の表情が動かない。
怒ってる顔よりよっぽど怖い。

「それじゃ各自すきな部屋で寝るとしましょうか。」

「「はい！」」
「ええ。」

それから数時間したら物音が聞こえてきた。
みんなが思ったことは同じ、
（（（（「アレ」降りてきたか・・・））））
だが実際は違う。

「・・・いよ～・・・」

「・・・い・・・なー・・・った？」

どこから聞いても「人間」の声だ。
今部屋の外にいる「人間」として考えられるのは、逃げてきた一般人か京谷かの二択だ。
しかし警察署の一階は美咲と優華がバリケードを築いたので入ってこれない。
つまり・・・・

（（京谷さんやっぱり寒かったんだ・・部屋に入れてあげなくちゃ！））

健斗と悠樹はやさしいもんだ。
それに対して美咲と優華は・・・

（ざま見ろ！）

（・・・・・・）

美咲は京谷のことなど微塵も気にせず、優華においては物音の正体が京谷だと知った直後に眠りに入ってしまった。

というわけで、部屋から出て京谷を部屋に入れてくれたのは男子二名だ。

翌日・・・

「まぁここはもう出るし四階は見に行く必要はねぇな。」

「あら？どうしたの？顔色悪いけど風邪でも引いたの？」

「・・・・・・・・・」

黙る京谷。
続いて健斗が話しかける。

「京谷さん、大丈夫ですか？」

「お前たちは天使だ。」

「「へ？」」

「ちょっと！私のこと無視してない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

再び黙る京谷。
すると優華が話し始めた。

「とにかく今日は車を手に入れたり、京谷君の友達助けたりしなきゃいけないんだから早くここを出発しましょう。」

「そうですね。」

「ちょッ！ちょっと！優華だって私と一緒に寝てたんだから気づいていたはず！それでも無視したんだから同罪でしょ！」

「あ・・・やっぱり気づいてたんだな・・・・」

「あ・・・」

「言っとくけど私寝てた。」

周りに仲間がいないことに焦る美咲。

「なーんてな。俺はこんなことでいじける男じゃないぜ！」

「え？」

「いやー昨日の口論は惨敗したからちょっといじめてやろうろ思ったからさー、でもホントに寒かったんだぜ？」

「・・・・・・」

「お！悔しいか？」

「別に…」

そう言って京谷の隣を通っていた美咲はわざとらしく肩をぶつけていった。

（当たり屋かお前は・・・）

色々あったが朝食を済ませた京谷たちは、車に乗り込む。

「武器とか忘れてないよな？」

「「大丈夫です！」」

「「大丈夫よ！」」

「よし、じゃあいくぜ！」

勢いよく警察署から飛び出す武装車両。
普通なら道路に出た時点で事故が起きていたのかもしれない。
だが今が道路は京谷たちの車しか走っていない。

さびしい風景ではあるが、友達を救わなければいけない京谷にとっては渋滞に巻き込まれるよりはいい。

「じゃあまず車屋に行くか・・・」

「そうね・・・」

静かな街を進み続けるエンジン音、揺ぎ無い決意を胸に京谷はアクセルを踏み込む。
目指すは友達救出だ。

殺戮（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございました！

大きな壁

車屋にはすぐ着いた。
あれから誰も車を持っていっていないのか、品ぞろえはばっちりだった。

「できるだけ大きいのがいいかな？いざとなったら寝れるぐらいの。」

「そうだな。でも俺たちの車以外は加工してないから前みたいに車がはねたら終わりだぞ。」
（まぁどんな車でも終わりだけど・・・）

「今はとにかく人がのれりゃいいよ。」

「じゃあアレなんてどうですか？」

「お！スポーツカーか！」

京谷は前から目をつけてはいたが、人数が三人だったため諦めていた。

「じゃああれは俺が運転する。」

「ええ～」

悠樹が声を上げる。

「お前だって見ず知らずの俺の友達を隣に乗せるのは気まずいだろ。」

「いや別に・・・・・」

「・・・・・・・」

京谷は真顔のままじーっと悠樹を睨んでみた。
周りから見たら見つめ合っていたように見えただろう。
だが悠樹はその数秒間の間にすべてを悟り、自分の身を守るための言葉を発した。

「そ・・・そうですよね！」

「悠樹。お前は物分かりが早くて素晴らしいよ。フッフッフ・・・」

怪しい笑い声（？）を上げる京谷。

「じゃあまずは鍵をとってきて、その次にかぎ合わせね。」

「ああ、そうしよう。」

（まてよ・・・俺鍵戻した記憶がないな・・・）

「先に行っててくれ、ちょっと車に忘れものをした。」

「わかったわ。「アレ」の奇襲に気をつけるのよ。」

「へいへい。」

（もし、美咲たちが鍵を見つけられればいいんだが俺には元に戻した記憶はない・・・・もし車になければ無駄足・・・・）

「頼むぜ神様よぉ～ここまで耐えてやってきてんだからよ！」

駆け足で車へ走る京谷。

数分後・・・・

「京谷ー、鍵なかったんだけど私たち鍵どこやったけ？確かあなたが持ってたはずよね？」

遂に美咲たちが帰ってきてしまった。

「ちょとあんた何やってんの！？」

京谷はスポーツカーの上に乗って、日光浴を楽しんでいた。

（ああ、もうだめだ。弁解がまるで思いつかねぇ・・・）

「えーと・・」

（もう正直に言おう！）

「実はよぉ・・・・」

「あ！そういえば！」

健斗が大声を上げた。

「京谷さん車の鍵貸してください。」

「だから今からそれについて話そうと・・・」

「違います。僕たちがのってきた車のです。」

「お・・おう」

小走りで走っていく健斗。
戻ってきた健斗の手には大量の鍵が握られている。

「健斗！ナイスだぜ！」

「いやー京谷さんが投げ捨てたのを拾っといてよかった。後で戻そうと思ったんですけど、結局戻すのを忘れてそのまま出発してしまって・・・」

（健斗・・お前はやはり天使だ！異論は認めない！）

「じゃ・・・じゃあ早速探すか。こいつに合う鍵を」

やはり時間がかかったが言っても数分程度だ。

「やったーーー」

はやり一番喜んだのは京谷。
運転するのが楽しみだったのだろう。

「エンジンをかけるぜ！」

ブォオオオオン……

地面を揺らすような低いエンジン音が響く。

「ほぇ～これがスポーツカーかすげぇな！」

「じゃあ私たちはこっちで進むから後から付いてきてね。」

「おう！」

車屋を出た京谷たち。

京谷の友達の居場所を知らない美咲は京谷に電話をかけようとするが、電話番号を知らなかった。

（なんてミスをッ！）

「あ！そういえば京谷さんの友達ってどこに住んでるんでしょうか？」

（よく気づいてくれたわ！健斗）

「ちょっと待っててください。今聞きますから。」

ピッ！

「！？」

（な・・なぜ、なぜ健斗が京谷の電話番号を知ってんのよ！？私でも知らないのよ？）

「け・・健斗～、いつ京谷の電話番号聞いたの？」

「警察署にいた時にふと思い立って聞きました。」

「ほかのみなさんの電話番号も入ってますよ。ほら」

（私は優華と悠樹以外は入ってない・・・）

「ま・・・まぁいいわ。で、場所はどこなの！」

「？？？」

（なんか怒ってるような・・・）

「えーとここから都市部へさらに二、三キロ進んだところにあるマンションだそうです。」

「了解。大体の勘で案内するから迷っても勘弁してね。」

「いえ、その必要はないと・・・」

「どうして？」

「都市部なら京谷さんも知ってるそうです。よく友達の家へ遊びに行くから、だそうです。」

「だからこれからは俺が先を走るよ、だそうです。」

「わかったわ。」

ブゥゥゥウウン・・・・

体に響くようなエンジン音が隣を走り抜けていった。

「あ、京谷さんが美咲さんに代われと・・・」

携帯を渡してくる健斗。

「もしもし？」

「悔しいか？」

軽く笑っているのが電話越しに分かる。

バギッ

今美咲が握力計を握ったら、男子に匹敵する、またはそれ以上の数値が叩きだされていただろう。

「い・・いえええ、別に私は困らないし！道がわからなくて困るのは運転している悠樹だしね！」

「ちなみに悠樹にはもう教えたぞ。」

また電話越しに聞こえてくるかすかな笑い声。

バギバギッ

美咲から表情が消え、携帯を握る力がさらに強くなる。

「ああ～僕の携帯が悲鳴を上げている！」

健斗が強引に美咲から携帯を剥ぎ取る。

「京谷さん、すみません切ります！」

ブツッ

しばらくの沈黙。

「番号あげましょうか？京谷さんの。」

「ええ・・・・あなたのもお願いね・・・・・」

そして美咲が携帯の電話帳を見ながらニヤニヤしていると、
前を走っていた京谷のスポーツカーがゆっくり減速し始めて、やがて止まった。
早速京谷に電話をかけてみる美咲。

「どうしたの？」

「ッチ！健斗か悠樹の野郎・・・・もうちょっと遊ぼうと思ってたのに・・・」

「今はそんなことはいいから！で、どうしたの？」

「前方に「アレ」の群れだ。」

「数は？」

「軽く百は超えてる。」

「なんで！？」

「近くの学校からだろう・・・・」

「！！！」

「ってことは、全部生徒？・・・・」

「先生も交じってるが九割が生徒だ。」

「そんな！」

大人だから大丈夫だったというわけではないが、やはり子供相手だと若干の迷いが生まれてしまう。

「ちょっと携帯貸してもらえます？」

健斗が手を差し出す。

「ええ。」

「ありがとうございます。」
「では京谷さん。今から射撃を開始しますので僕たちの車の後ろへ隠れてください。」

なんかしらの返事をしたのか、京谷の車が動き出した。

「ちょッ！ちょっとあんた！相手は子供よ？回り道をしたって・・・・」

「もう「人間」じゃないんです！」

「そんなこと言ったって・・・・」

「大体大人の容姿をしてる「アレ」は散々殺してきたじゃないですか！」

「・・・・・・」

「生きるためなんです・・・・許してください。」

健斗は京谷が自分たちの車の後ろにスポーツカーを止めたのを確認すると、銃座につき始めた。

「いきます・・・・・」

ダダダダダダダダッダダダダダダダダダダダダダ・・・・・・・・・・

ズシャズシャズシャズシャ・・・・・・

車の中にいても、銃声に交じって体が弾け飛ぶ音がする。

また、「アレ」が集まっていたということもあって、前にいた「アレ」に撃ち込んだ弾が貫通し、後ろの「アレ」にもダメージを与えていた。

数分後・・・・・

「終わりました。」

道路はたくさんの肉片と血が溢れていた。

「うッ！」

口を押さえる美咲。
これが普通の反応というものだ。

しかし京谷は「アレ」が消えたことを確認すると、
美咲たちの車の後ろから出て、まだ形が残ってる子供の体を踏みつぶしながら進み始めた。
血脂でのスリップを恐れているのか、スピードはそこまで出ていない。
さすがにその光景と、踏みつぶす音には美咲以外の四人も寒気を感じた。

「「「「・・・・・・・・」」」」

そして悠樹もゆっくりとアクセルを踏み始めた。

こうしてまた一つ試練を乗り越えた京谷たちは、先に進む。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1085z/

パンデミック（完全版）

2011年12月11日11時47分発行